

2010年台湾立法委員補欠選挙（その2）

小笠原 欣幸

補選第一ラウンドの結果

2010年2月27日（土）、今年2回目の立法委員補欠選挙が行なわれる。1月9日の1回目は、投票率が低下する中、民進党が3議席すべてを獲得した《表1》。いずれも国民党の議席を奪取したので、民進党の大勝利、国民党の大惨敗という結果となった。要因はいくつかあるが、あえて1つに絞れば馬英九政権の不人気に尽きる。《表2》は桃園県第二選挙区の前回立法委員選挙、12月県長選挙、1月補選の3つの選挙の絶対得票率の推移を示したものである。2008年立法委員選挙と比べて、民進党も票を減らしているが、国民党の票は半減した。前回国民党に投票した人の約半分が棄権に回ったと考えられる。

《表1》1月9日立法委員補欠選挙の政党別得票率および投票率

	民進党	国民党	無党籍その他	投票率
桃園県第二選挙区	58.06%	40.04%	1.91%	38.42%
台中県第三選挙区	55.02%	44.98%	0.00%	45.09%
台東県選挙区	49.46%	45.25%	5.29%	39.44%

《表2》桃園県第二選挙区の3つの選挙の絶対得票率の推移

	国民党	無党籍その他	棄権無効票	民進党
2008年1月立委選挙	30.64%	0.29%	43.86%	25.21%
2009年12月県長選挙	27.32%	1.55%	42.41%	28.71%
2010年1月立委補選	15.31%	0.73%	61.76%	22.20%

※県長選挙は全县ではなく第二選挙区の数字である。この選挙区は県内唯一緑優勢区なので、民進党の鄭文燦の得票が国民党の呉志揚を上回った。

《表3》台中県第三選挙区の2つの選挙の絶対得票率の推移

	国民党	無党籍その他	棄権無効票	民進党
2008年1月立委選挙	30.27%	0.00%	44.93%	24.81%
2010年1月立委補選	20.11%	0.00%	55.29%	24.60%

※台中県は県長選挙が実施されていない。

筆者が最も注目していた台中県第三選挙区も民進党候補が当選した。《表3》のように、ここでも国民党の支持者の棄権が民進党の勝利につながった。だが、投票率の落ち込みは他の2選挙区より小さい。両党の候補者がかなり競い合った末に民進党が勝利したのである。同選挙区は、①都市部に近い、②地方派閥の集票力もあるが中間票・浮動票もある程度存在する、③国民党が優勢だが圧倒的な強さではない、という特徴を持つ。このような

選挙区は、他に台北県、彰化県、高雄県などに10個所くらいあり、今後心理的影響が波及していくであろう。国民党の選挙関係者は、非常に嫌な場所で嫌な負け方をしたという気分であるに違いない。

台東県では、民進党が県長選挙・立法委員選挙を通じて初めて議席を獲得した。同県では、馬政権の不人気に加え、候補者の資質も選挙結果に大きく影響したと考えられる。なお、同県では前回立法委員選挙で民進党が公認候補を立てていないので、データの比較ができない。

補選第二ラウンドの概況

2月27日に投開票が行なわれる4議席は、いずれも支持基盤が明確な選挙区なので、順当であれば民進党1議席、国民党3議席の現有のままとなる。しかし、政権与党への不満という台湾政治の大きなうねりは変わっていないので、今回も波乱が起きる可能性がある。投票率は低く、国民党支持者の出足は鈍いと予想される。各選挙区の候補者と情勢を《表4》にまとめた。

《表4》2月27日立法委員補欠選挙の候補者および選挙情勢

選挙区	候補者	選挙情勢
桃園県第三	黄仁杼(民進党, 県議) 陳學聖(国民党, 元立法委員) 林香美(無党籍, 前副市长) 呉餘東(無党籍, 県議)	国民党が圧倒的に優勢な選挙区であるが、候補の一本化に失敗した。国民党を除名された2候補が善戦すれば、民進党候補が当選する。
新竹県	彭紹瑾(民進党, 前立法委員) 鄭永堂(国民党, 前国大代表)	国民党が圧倒的に優勢な選挙区であるが、12月の県長選で分裂した後遺症が出ている。国民党は派閥バランスの論理で候補を選んだが、候補個人の実力・魅力は未知数である。地方派閥がまとまれば国民党が有利だが、民進党にも当選の可能性はある。
嘉義県第二	陳明文(民進党, 前県長) 林徳瑞(国民党, 中正大学教授)	民進党が圧倒的に優勢な選挙区。候補個人の比較でも、前県長の陳明文が知名度・実績で林徳瑞を圧倒し、当選確実。
花蓮県	蕭美琴(民進党, 前立法委員) 王廷升(国民党, 東華大学副教授) 施勝郎(無党籍, 観光協会理事長)	国民党が圧倒的に優勢な選挙区。国民党は有力地方政治家の息子を公認し派閥の争いを何とか封印した。県長選挙対立の影響は限定的で、国民党が基礎票の厚さで逃げ切るパターンである。しかし、民意調査では民進党の急速な追い上げと出ている。接戦になる可能性もある。

国民党は金溥聰が秘書長に就任してから実質的に初めての選挙である。金秘書長が選んだ公認候補の顔ぶれは、①清廉であくの薄い政治家(桃園県第三)、②清廉で無難な学者(嘉義県第二)、③地方派閥のバランスをとるための人物(新竹県と花蓮県)に分類できる。地方の実力者は今回擁立されていない。①と②は馬英九好みのタイプで、③は地元の現実を重視しそれに妥協した結果である。花蓮県の候補は③に分類したが、②の要素も含んでいる。

②のタイプは、昨年9月の雲林県立法委員補選と12月の雲林県長選挙で試され、いずれも完敗に終わっている。嘉義県第二は民進党の地盤であり、なおかつ、民進党随一の実力者が出馬している。そこに②のタイプを当てたので、民進党の当選が確実である。残り3つは国民党の堅い地盤なので、民進党が1つでも勝てば大勝利である。筆者は、花蓮県については情報不足なので、今回は主に桃園県第三と新竹県を検討することにした。

桃園県第三選挙区

桃園県第三は、隣の第二選挙区の補選、12月の県長選挙・市長選挙のデータと対照させることができるので詳しく分析してみたい。まず、過去2回の選挙の得票率を整理する。国民党は立法委員に当選した呉志揚が県長にくら替えたので、同一の候補が2つの選挙を闘った。呉志揚は2008年立法委員選挙で63.22%の得票率で圧勝した。12月の県長選挙で当選を果たしたが、得票率は52.22%に止まった。地盤である中壢市では得票率58.33%と健闘したが得票数は大きく減らした。桃園県第三選挙区(中壢市とイコールではないので注意)の2つの選挙の絶対得票率は《表5》のとおりである。呉志揚の絶対得票率は38.13%から30.50%へと大きく低下した。しかし、それでも民進党にかなりの差をつけている。

《表5》 桃園県第三選挙区の過去2回の選挙の絶対得票率の推移

	国民党	その他	棄権無効票	民進党
2008年1月立委選挙	38.13%	0.27%	39.69%	21.91%
2009年12月県長選挙	30.50%	1.13%	46.13%	22.24%

※第三選挙区は中壢市が中心であるが、市内の12の里は第六選挙区(八徳市、大溪鎮、復興郷)に編入されている。12の里は眷村が含まれ国民党の支持が高い。県長選挙で国民党の呉志揚は、中壢市全体での得票率は58.33%であったが、この12里では71.39%であった。これを除いた第三選挙区の呉志揚の得票率は56.62%である。

一方、今回の補選の民進党の候補者黄仁杼は、12月の中壢市長選挙に出馬し善戦している。この市長選挙で、国民党は魯明哲と呂明美の2名を公認した。結果は、魯明哲が37.83%の得票率で当選し、黄仁杼は37.12%、何と17票差まで迫ったが及ばなかった。呂明美は25.05%であった。このように国民党は2人出馬し分裂選挙になっても当選できるだけの基礎票を有している。桃園県第二選挙区とは支持構造がかなり異なり、第二で勝ったからその勢いで第三も、とは行かないことがわかる。

さて、今回の補選でその国民党は分裂した。公認を得た陳學聖は台北市育ちの外省人第二世代で、深藍ではなく台湾アイデンティティ寄りの人物である。陳學聖は、1998年に台北市第二選挙区で初当選し立法委員を2期務めたが、2004年選挙で落選した。その後高雄市での出馬を目指すも果たせず、朱立倫のついでに桃園県政府に入り文化局長を3年間務めている。中壢市の地元では、退任する市長、副市長、県議の3名が国民党公認を目指していた。金溥聰は、この中の誰かを公認すれば他が反発し分裂選挙になるので地元の人間ではない陳學聖にしたと考えられる。陳學聖は馬英九の路線に近いので政権テコ入れにプラ

スになるという打算もあったと思われる。しかし、金秘書長の調整工作は失敗し、副市長の林香美と県議の呉餘東は党を除名されても立候補に踏み切った。地元の有力者(県副議長、市長当選者)らは、ほとんどが党公認の陳學聖についた。この 2 人には当選の可能性はないが、民進党に漁夫の利を与えるだけの得票を上げるかどうか焦点である。《表 6》で台湾メディアの民意調査を整理した。TVBS と聯合報の調査では陳學聖がリードし、林香美と呉餘東は低い支持率に止まっている。

《表 6》 桃園県第三選挙区の候補者の民意調査

	旺旺中國時報	TVBS①	TVBS②	聯合報
調査日	1 月 15 日	1 月 14-15 日	2 月 8-9 日	2 月 10-11 日
黄仁杼	23%	31%	29%	21%
陳學聖	17%	34%	36%	29%
林香美	14%	13%	9%	6%
呉餘東	7%	6%	9%	6%

TVBS の民意調査は、12 月の県長選挙で誰に投票したかを質問に入れている。TVBS②の調査では、国民党の呉志揚に投票した人が 47%、民進党の鄭文燦が 16%と出ている。だが、実際の結果は、呉志揚 56.62%、鄭文燦 41.29%であった。したがって、この調査では民進党支持者の動向が何らかの理由で十分に反映されず、かなり低い数値になっていることがわかる。この差異を補正する処理を筆者独自に行なったところ、黄仁杼 38.2%、陳學聖 32.5%、林香美 8.2%、呉餘東 8.9%という数字になった。「未決定」に分類される 12.2%の動向については、支持表明をしている人と同じ比率の投票行動をとると想定し 4 候補に加算する。その結果、黄仁杼 43.5%、陳學聖 37.1%、林香美 9.3%、呉餘東 10.1%となった。これは、2 月 8-9 日時点での TVBS の調査結果を実際の選挙民の支持構造に近づける補正処理をした数値である。今後、林香美や呉餘東の支持票が陳學聖に移れば(棄保)、陳學聖の逆転も十分ありえる。補正後の数値は民意調査の数値以上に誤差が大きくなることを了解していただきたい。

なお、この補正処理の有効性を見るため、桃園県第二選挙区についても同じ方法で計算をした。当該選挙区を対象とした TVBS の 12 月 22-23 日調査では、誰に投票するかという質問の回答は、郭榮宗 37%、陳麗玲 33%、彭添富 7%であった。同調査で、県長選挙で誰に投票したかという質問の回答は、国民党の呉志揚が 39%、民進党の鄭文燦が 22%と出ている。実際の結果は呉志揚 47.44%、鄭文燦 49.86%であった。ここでも民進党の支持者の数字が過小に反映されている。この差異を補正し、「未決定」を上述のように処理した数字は、郭榮宗 56.5%、陳麗玲 35.5%、彭添富 8.0%となった。実際の投票結果は、郭榮宗 58.1%、陳麗玲 40.0%、彭添富 1.9%である。彭添富は退選を表明したので、調査時点での彭の 8%が郭と陳に流れたと見れば、この補正処理は桃園県第二選挙区に関しては実態に近い数値を示したと言えるであろう。

新竹県選挙区

新竹県については、国民党の地方派閥がまとまれるかどうかのカギである。筆者が観察している他県の地方派閥の行動様式から類推すると、一般的に次のように説明することができる。いま現県長のA派、前県長のB派、県議長のC派の3つの勢力があるとする。国民党の県党部にはたいした力はなく、県内で国民党と言えこれら地方勢力の集合体のことを指す。2008年総統選挙では、どの派も馬英九を全力で支援した。馬英九および党中央としては、どの派とも良好な関係を維持したい。

A派とB派は過去の選挙で裏切りや権謀があり、長年対立し怨念が溜まっている。12月の県長選挙では、県長の任期を終えるBはC派と同盟しCを候補者としてAに対抗したが、Aが当選しA派が念願の県長ポストを掌握した。A派とB派とが「政権交代」したのである。Aが立法委員から県長にくら替えしたことで補欠選挙が行なわれるわけだが、これは県長選挙の延長戦で、どちらも負けるわけにはいかない。党中央は、再び三つ巴になり民進党に議席を奪われることを恐れ、必死の調整に乗り出した。党中央は、Bの弟を擁立し、A派は県長、B派は立法委員とポストを分け合うことで派閥対立を押さえ込もうとした。B本人あるいはB派幹部であればA派が納得しないが、政治色の薄い「弟」氏であればA派とC派はしぶしぶ従うと考えたのである。

確かにA派とC派は候補の擁立を取りやめた。しかし、A派はライバルの「弟」氏を真剣に支援する気にはなれない。2年後には立法委員の本選挙が控えている。今回「弟」氏が当選すると、次回の公認は決まったも同然となり、この県はA派とB派の対立が延々と続く。「弟」氏が落選し民進党が当選すると、B派は凋落し、A派の天下となり次回はA派から候補を立てやすくなる。仮に県長本人が融和を考えてもA派の幹部らは先を考え勝手に動く、というのが台湾の地方派閥の行動様式である。「国民党はどうなってもよいのか」と問われれば、「それは困る」「そうではない」と答えるが、それ以上に自派が大事というのが本音である。

とはいえ、これはあくまで本音の話であって、派の組織系統を使って民進党に票を回せと指示を出すわけではない。実際には手抜きを形をとるので、一般の支持者は、普通に党の公認候補に票を入れる人もいるし、投票に行かない人もいる。「弟」氏の擁立は、同盟しているC派にとってもおもしろくはない。本来ならCが候補となってもよかったのである。県長選挙の雪辱を晴らすといっても、あまり力が入らないであろう。こうして、必死で票固めをやるのはB派だけとなる。ただし、A派にもジレンマがあって、「弟」氏が本当に落選すると党中央の怒りを買って、財政難の県政府の運営に支障をきたす可能性もある。国民党と民進党の基礎票は2対1なので、手抜きがあっても国民党候補が当選する可能性は十分ある。しかし、馬政権の不人気、および、投票率の低下という国民党に不利な要素があるので、やはり他派もある程度支援することが当選の条件となる。民意調査では、《表7》のように民進党の彭紹瑾がリードを保っている。

《表 7》新竹県選挙区の候補者の民意調査

	旺旺中國時報	TVBS①	TVBS②	聯合報
調査日	1月 18-19日	1月 11-12日	1月 26-27日	2月 8-10日
彭紹瑾	37%	44%	44%	34%
鄭永堂	17%	34%	34%	29%

補欠選挙後

これらの検討により、投票 10 日前の情勢として、筆者は、補選第二ラウンドは民進党の 3 勝 1 敗になる可能性が高いと考えている。民進党の 2 勝 2 敗という可能性も十分あり、それでも民進党の大勝利である。花蓮県で大波乱が発生しまたしても民進党全勝という可能性もゼロではなさそうだ。民進党の 2 勝または 3 勝は馬政権には大打撃であるが、1 月 9 日の 3 戦全敗の衝撃が非常に大きかったので、今回の敗北の可能性は、政権与党内部である程度織り込まれていると見られる。民進党の立法院の議席は合計で 32~33 議席となり、4 分の 1 の 29 議席は超えているが、行政院長の不信任案の発議が可能な 3 分の 1 の 38 議席には届かず、立法院の攻防には変化はないと見られる。台湾政治の焦点は、直ちに年末の五都市長選挙の候補者選びに移るであろう。

選挙後(あるいは投票日直前もありえる)、馬政権は内閣と党の部分的な人事を行なうであろう。金溥聰はすでに、新聞局長の蘇俊賓を国民党の文化伝播委員会(宣伝部門)主任に異動させることを発表している。また、総統府スポークスパーソンに羅智強を起用する見込みである。2008 年総統選挙で、羅智強は馬英九のスポークスパーソン、蘇俊賓は国民党のスポークスパーソンを務め、選対本部の金溥聰を補佐する役を担った。他に内閣や国営企業に有力者を配置する人事もあるかもしれない。これは、金溥聰主導で情報発信力・組織力・集票力を高めて再選に向け走り出す選挙戦略の一環と見える。国家安全会議の蘇起の辞任もこの流れの中にあるのかもしれない。

民進党は、2 勝または 3 勝によって大勝利を宣伝できる。補選 7 議席のうち 5~6 議席獲得に導いたということで、蔡英文主席の党内の発言権・指導力が高まるであろう。これは、年末の五都市長選挙の候補者のスムーズな選定に有利に働くであろう。ただし、民進党が大勝ムードに沸き返ると、逆に本番で躓くことになるかもしれない。民進党は、8 年間の政権運営、政策についてほとんど何の総括もしていないし、腐敗問題の再発防止策も出していない。対中政策についても党内の議論はほとんど進展していない。党勢回復は「敵失」にすぎないことが、大勝ムードで忘れ去られる可能性がある。蔡英文主席の難しい舵取りは続くであろう。(2010 年 2 月 17 日記)

【出典】本稿の表はすべて筆者作成。

「2010 年台湾立法委員補欠選挙 (その 1)」もご覧ください。

[小笠原ホームページ] <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ogasawara/>